



今年の教区の目標

われら皆 和解の器
平和の担い手

〒902-0067 那覇市安里3-7-2

カトリック那覇教区本部

TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474

発行人 W.F.バートン司教 1部40円

<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2023年5月1日 (毎月1日発行)

カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ

第774号 (5月号)

第57回世界広報の日、5月14日(復活節第6主日)

福音宣教はわたしたちの使命です。「世界広報の日」は、この福音宣教の分野の中でもとくに新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、映画などの広報媒体を用いて行う宣教について、教会全体で考え、反省し、祈り、献金をささげる日です。日本のようにマスコミや技術の進歩している国で、広報が社会や文化に及ぼす影響ははかりしれないものがあります。

広報の重要性を再認識し、広報を通して社会と人々にどのようにかかわっていくことができるか、また、実際どのようなにかかわっているかを考えることが大切です。「世界広報の日」は、第二バチカン公会議で定められ、一九六七年以来、毎年、特別のテーマが決められ、教皇メッセージが出されています。今年も、「心をもって、『愛に根ざして真理を語る』(エフェソ四・15)」をテーマに、教皇フランシスコのメッセージが発表されています。

―― 中略 ―

「穏やかに語る舌は骨をも砕く」と箴言には書かれています(二十五・15)。心をもって語る

ことが、今日ほど求められたこととはありません。戦争があるところに平和の文化を広めるため、憎しみと敵意が荒れ狂うところに対話と和解の道を開くためです。わたしたちが今体験している地球規模の争いという悲劇的状况では、友好的なコミュニケーションの確立が急務です。「開かれた敬意ある対話に向かうよりも、屈辱的な形容詞を相手にあてがう」、「反対者の信用をすぐ失墜させようとする傾向」を克服しなければなりません。



教皇フランシスコ

対話に前向きで、包括的軍縮に尽力し、わたしたちの心に潜む戦争志向の解体に取り組む、コミュニケーションが必要で、聖ヨハネ二十三世が回勅『パルチエム・イン・テリス(地上の平和)』で預言的に説いたように、「真の平和は相互の信頼の上にしか構築できない」(61)のです。自分の側の安泰にこだわることなく、むしろ大胆かつ創造的に、危険を顧みず、合意できる共通項を見いだそうとするコミュニケーションを要する信頼です。

六十年前と同様、わたしたちは今、人類が戦争の激化に怯える暗黒時代の中にあり、一刻も早くブレーキをかけなければなりません。コミュニケーションの領域もそうです。民族や領土の消滅を主張する言説が、これほどまでに軽々しく発せられているのを耳にするのは、おぞましいかぎりです。

残念なことに、ことばはしばしば、残酷な暴力による戦争行為に発展するものです。だからこそ、あらゆる好戦的なレトリックは否定されなければなりません。イデオロギー目的のために真実を歪め捏造するプロパガンダは、何であれ否定されなければなりません。むしろ、民族間の争いを解決するための条件を整備するため、あらゆるレベルにおいてコミュニケーションが促進されなければならないのです。

キリスト者としてわたしたちは、平和の命運を決するのは、まさに回心であると知っています。戦争というウイルスは、人間の心から生じるからです。閉ざされ分断された世界の闇に光をもたらさし、これまで手にしたもののよりもよい文明を築くための義のことばは、心の中から生まれ出るものです。回心は一人ひとりに求められている努力ですが、とりわけ情報伝達に携わる人々にとつては、自らの職業を使命として果たせるよう、責任感と呼び覚ましてくれるものなのです。

主イエス、御父の心からほとばしり出るままのことばであるかた、このかたの助けによってわたしたちが、コミュニケーションを自由で、廉直で、心あるものにしていきますように。

主イエス、人となつたことばであるかたの助けによって、人々の胸の鼓動に耳を傾け、わたしたちが兄弟姉妹であることを今一度かみしめ、分断をもたらし敵意を取り除くことができますように。

主イエス、真理と愛のことばであるかたの助けによって、愛において真理を語ることができまうように。そうしてわたしたちが、互いを保護する者であるとの自覚をもつことができますように。

ローマ サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂にて
教皇フランシスコ

聖母月の五月、聖母マリアの取次ぎを願いながら、私たちの使命を果たして参りましょう。

Mass in The Pandemic : both sides of view between Indonesia and Okinawa

By Lucia K. Herwening (Maehara Catholic)

First of all, I am thankful to Jesus for this opportunity to share my experiences as an international Catholic student in Okinawa. During my first weeks in Japan, I needed to do quarantine, and during that time, I attended the Sunday mass online. I felt something missing every time I attended online mass. Then, during my quarantine days, I searched for the nearby catholic church from my campus, Ryukyu University. I am super relieved and grateful that the Maehara Catholic Church is walkable from my dorm.

Long story short, my quarantine days ended, and I finally went to Okinawa. I couldn't wait to see Okinawa's Ocean, but for sure, I really miss attending church. At that time, the end of April 2022, in Indonesia, especially Jakarta, if you want to join the mass, you need to register with an application system that is integrated with a personal database. People older than 60 years old were not allowed to join the offline mass because of the high risk of getting infected by the COVID-19 virus. Besides, kids under 12 years old were not allowed to attend the Sunday mass. Meanwhile, my mom was 60 years old at that time, so she couldn't go to church. My mom was quite upset and sad because she couldn't get the holy bread. Well, in that case, fortunately, people who are allowed to attend mass directly in the church can take charge of delivering the holy bread to those who need it. However, before you took home the holy bread, you needed to join the mass and proof it with the barcode sent for you to prevent misuse. Every week at that time, when I need to bring the holy bread from the church to my house for my mom, I feel like St. Tarsicius, who brought the holy bread to prisoners. It's not an easy task; that time before I took the holy bread, I was praying, fasting, and concentrating to not make unnecessary interactions. After that, I felt so grateful and happy that, under Jesus' guidance, I could give the holy bread to my mom. At the same time, people who have been waiting for the holy bread at home did the mass online (which was mandatory, even though the church couldn't check it one by one, but the Holy Spirit sure guided us to do so).

Then I arrived in Okinawa. In the early days here, I checked the route from my dorm to the church. I am relieved *yokatta the church is near. I enjoy the time spent walking from the dorm to church. Then, I still remember the day I met Father Denise. I asked about the schedule of the mass, and should I need to do the online registration before? Or should I fill out some forms for my personal information? Moreover, I was quite shocked and happy because attending mass here is not a requirement. I felt relieved and grateful for that; it seemed like the normal days before the pandemic. I am also glad; all ages are free to attend the mass.

Two months passed, and my time was coming to take charge of universal prayer. I was so panicked and anxious; that was my first-time taking charge of the liturgy. While in Jakarta, I never took charge of any liturgical task. Mostly in Indonesia, the ones who did the universal prayer were the lectors. Every person who wants to become a lector needs to take lector courses for several months and practice a lot. Under the training from the mentors, there will be an assessment for the lector candidates. So many people want to become lectors, so while I was in Indonesia, I had no intention to become a lector. The reason is that I thought many people would do it, and there are always a lot of human resources available. Well, to be honest, sometimes I was thinking of serving as a lector as well, but it seems I am not good enough as a lector.

In contrast, in Okinawa (in my case, Maehara Catholic Church), everyone is welcome to become the lector. Then I realized that becoming the lector or any role in the church is not based on how good you are at it; rather, the most important point is how sincere you want to serve Jesus and people. Once again and always, I feel grateful for all these opportunities.

Another interesting point of view is that Catholics are a minority in Indonesia. The Catholic Church in Indonesia (Indonesian: Gereja Katolik di Indonesia) is part of the worldwide Catholic Church, under the spiritual leadership of the pope in Rome. Catholicism is one of the six approved religions in Indonesia, the others being Islam, Protestantism, Hinduism, Buddhism, and Confucianism. According to official figures, Catholics made up 3.12 percent of the population in 2018. The number of Catholics is, therefore, more than 8.3 million. Indonesia is primarily Muslim, but Catholicism is the dominant faith in certain areas of the country. Even though Catholics are the minority in my hometown, the Catholics in my church are (more or less) 7,900 families (based on 2007 data). Because there are so many people at one mass, we usually have three masses on Sunday. I need to arrive very early to get a seat, so I arrived early the first time I visited Okinawa, but there were still fewer people. What an experience.

In the end, I am glad I could be a part of the Catholic community here. I feel warm because I do not feel alone. I feel like being with my family. Then, the most precious one, I can contribute to serving Jesus in the Eucharist. So that's all my little point of view, and I hope you enjoy reading it. Ja, Jesus bless you all.

パンデミック中のミサ事情：インドネシアと沖縄【要旨】

ルチア・K・ハーウェニング（真栄原教会）

筆者のルチアさんは、琉球大学大学院でサンゴ礁保全の研究をするため、昨年の4月にインドネシアから来沖されました。インドネシアと沖縄のコロナ禍のミサ対応の違いを通じて、この1年に感じたことが綴られています。一部を要約します。（真栄原教会 千村次生）

コロナ禍のインドネシアではミサに与るためにはオンライン登録が必要でした。また、60歳以上と12歳未満の人は対面でのミサへの参加が許されませんでした。そのため、ミサに与れる私は母親（60歳）のためにご聖体を届けるという重責を担いました。ご聖体を届けるのは簡単なことではありません。聖タルチジオ（牢獄で迫害を受ける人々にご聖体を届けようとして殉教）のような心持ちでした。来沖した際、寮から近い真栄原教会を訪ねましたが、デニス神父さまから、登録の必要が無いこと、全ての人が参加できること、また驚いたことに、不安を感じたらミサに与ることを免除されることを聞いて安心しました。

さて、2ヶ月ほど経った時、突然聖書朗読を頼まれました。インドネシアでは、特別なトレーニングを受

けないと朗読者になれません。私には資格がありません。私はパニックに襲われ、心配になりました。ところが、真栄原教会では希望すれば誰でも朗読することができます。上手な朗読ができることではなく、イエス様と人々にどれだけ誠実に仕えたいかという気持ちが必要だということに気づかされました。典礼奉仕の役目を与えてくれたことに感謝しています。

私は、沖縄でカトリックコミュニティの一員になって幸せです。孤独を感じないで、穏やか気持ちでいられます。家族と一緒にいるような気がします。それから、最も大切なことは、ご聖体を通じてイエス様に仕えることができることです。それが今、私の感じていることです。

楽しんで読んでいただけましたでしょうか。

イエス様の祝福が皆様の上にありますように。

洗礼おめでとうございます。
ごさいます。

石垣教会

（4月9日 幼児洗礼）

・ヨセフ 里中敬信

名護教会

（4月9日）

・マリア・コレッティ 鍋島和子

首里教会

（4月8日）

・マザー・テレサ 石川奈緒

（4月9日）

・ペトロ 渡辺慎一

与那原教会

（4月8日）

・ヨセフ 玉城仁秀

・マリア 玉城小百合

・アシジのフランシスコ 仲吉良昭

・マリア・テレジア 園田美幸

（4月16日 幼児洗礼）

・マリア・ステラ 城間結羽

具志川教会

（4月9日 幼児洗礼）

・カタリナ・ラブレ 久保田澤花

コザ教会

（4月8日）

・テレジア・マリア 桑江祥子

・Ana Marie Lacanilao



マリアが出かけて 行ったように

マイケル・ヴィン神父
名護教会 主任司祭



この春も聖母マリアの月が巡ってきました。毎年慣例で、私たちは愛する母マリアへ美しい花を持って教会へ向かいますが、ファティマの聖母マリアのお言葉通りに、日々の霊的花束も併せてお捧げすることは、より良いことです。

「マリアは出かけて、急いで山里に向かった」(ルカ・39)というマリアの模範に倣い、その中のひとつでも良い行いができるよう祈り黙想することも大切なことです。この御言葉は、今年のワールドユースデー(世界青年大会日)のテーマでもあります。私たちの母、マリアが急

いで山里へ向かったのは、神の御子イエスを身籠った喜びを従姉妹であるエリザベトと分かち合うためでした。

彼女は何年も教会に行けず、ご聖体もいただかず、赦しの秘跡も受けておられなかったのです。ベッドに横たわる彼女の部屋を訪れるや否や、開口一番「どうして、神様は私を見捨てられたの! なんて私をこんな目に遭わせるの!」と大声で顔を真っ赤にして叫びました。

そこで、私は、彼女に近づき

「○○さん、一緒にお祈りしてからお話ししましょうね。」と笑顔で言いました。みんなで、「あめのきさき」を歌ってから、病人訪問式は始まりました。聖体拝領と接手をして再び祈り、最後に「マリアさまのころ」を

歌い始めると、次第に彼女の表情は明るくなり、目には涙が溢れていました。病人訪問式が終わると大きな声で「神に感謝!」と手を合わせて叫びました。そして私たちの方を見て「神父様、皆さま、本当にありがとうございます!」と泣きながら握手を求めてきました。

イエス様のご聖体をくださいたい

たことで、彼女は聖霊に満たされたのです。私たちは、その後も話に花が咲き、笑い声と共に信仰の喜びを分かち合いました。

その中で、彼女が、マリアさまも賛美も大好きなこと、そしていつかカラオケで得意の演歌を歌いたいと思っていることなどが分かりました。帰り際、私が「では、また来週会いにきま

すから、その時、賛美だけでなく、演歌も一緒に歌いましょう」と言う

と、彼女が、自らベッドから起き上がり、自分の足で立つて、私たちに感謝の投げキッスをしてくれました。

私たちは、聖母マリアのように、大きなことは成し得ませんが、日々の生活の中で小さなことに心を込めることは出来

ます。祈りましょう。マリアさま、私たちがあなたに倣い、青空のような広い心を持てるように助け導いて下さい。マリアさま、私たちが兄弟姉妹に復活の喜びと光と信仰を分かち合っているように執りなして下さい。アーメン。

教区 NEWS 教会

洗礼式の喜びのうちに

宮古島平良教会

喜ばしいご復活の四月九日、次の幼い子ども三名が洗礼の秘跡を受けました。

- ・フランシスコ 上地 晴翔(4歳)
- ・ヨセフ 上地 竣翔(2歳)
- ・クララ 上地 すみれ(1歳)

ヨアキム神父司式のもと、ご両親、代父母、教会の皆さん共に、まだあどけない子どもらを囲み、神様の恵みのうちに祈り、喜びを分かち合いました。



私の自宅の近くには大学があり、住宅は老朽化してはいるものの、一人住まいにしては広すぎることもあって、海外からの留学生をサポートしています。国別には、ナイジェリア、インドネシア、フィリピン、タイ、ブラジル、マダガスカル、ベトナム、エジプト、インド、パラオ、オランダ、等から来た学生達です。日頃は寮と研究室の往復で、週末にはストレスを感じることがあると聞き、微力ながらお手伝いをしています。

振り返ってみると、一九六二年、私の東京での下宿先が、イタリアのカノッサ修道院の経営する少人数の女子寮でした。

たて軸よこ軸 留学生のサポートは楽しい

普天間教会 古波鯨 孝子

ある日のこと、故犬養道子氏の帰国講演会が某大学であると聞き、友人と駆けつけて行きました。

当時は女性の海外留学等は夢のような話でした。しかし犬養氏は元総理の孫娘とは言え、アメリカ・ボストンを皮切りにヨーロッパ各地を回りました。その体験を本にまとめたのが、『お嬢さん放浪記』です。

その本を手にした私は、その書から素晴らしい言葉を教わりました。その中の一つに、「争いよりは友情を、非難よりは理解を、愚痴よりは建設を、あなたのまわりにひきいられるような、豊かな人間になってほしいと思います」というこ

とでした。

又、この本に登場するモラ神父様のこととが私のカトリック入信のきっかけになりました。モラ神父様は学生のためにパリ郊外旅行のプランをたてたり、パリを案内してフランスを知る仲立ちの役をつとめたり、労をおします日本人とみれば、自分のポケットをはたいて自宅に招き、相談に乗ったり、打算や駆け引きの一つもない友情を常に示して下さったことです。

又、裕福でないパリ日本人の燃料のこゝとまで心配して下さったそうです。とても神父様のようなことは出来ませんが、週末には我が家でささやかな食事会等をしています。

モラ神父様のなさったことを意識して、これからも留学生をサポートして行きたいと思っています。私も八十四歳、後期高齢者です。わたしの方こそ、皆さんにお世話をかけております。沖縄の諺に、

「トゥシユヌヤンメーヤ、ヒービーヨーイン」(年をとって病気をすると一日一日悪くなるのが速くなる)とありますが、今わたしがそれを体験しています。体調の悪い時等、そろそろ神様からお呼びかなあと思ったりしますが、そのことを学生たちと話しすると、「まだまだやることがある。百歳まで頑張つて」と言い、励ましてくれます。

神様の元に行つたとき、「よくがんばったね」と神様に褒められることを、望んでいます。あまり熱心な信者ではないですが、最後まで信者としてぶれない人生を全うしたい。教会の皆さんにはこれからもよろしく願いいたします。

カリタス那覇報告：ゆいまーる事業、二人三脚で！

私たちカリタス那覇が活動開始当初から連携している「ゆいまーるの会」代表嘉手苺直美さんから、カリタス那覇への感謝状がマーシーさんのもとに届きました。一部ご紹介いたします。

『2020年6月に、カーゴスの1階にて始めた、ゆいまーるボックスから今日まで、沢山のご支援をいただき心から感謝申し上げます。始めてお会いした、マーシーさんの発した言葉はいまでも忘れられません。「嘉手苺さん、いちゃりばちょうでーですよ。」1人で始めた支援活動ですが、マーシーさんの言葉に甘える事としました。それから、3年です。ゆいまーるの会は、ゆいまーる事業として現在も活動を行っています。

牧志公園は、月4回～5回

女性火曜日(約80人) 男性木曜日(約90人) 毎月のべ利用者は、300人以上
3年間の、のべ利用者 11,667人となります。

安里一区公民館にては、2022年5月から活動開始、「0歳～17歳の子ども対象世帯への生活支援」を、毎月2回 第二、第四の土曜日に活動しています。

月55世帯 180人程が参加し、のべ利用者は346世帯 974人が利用しています。

カトリック教会の皆様には、資金や食糧品のみならず生活用品も沢山ご支援頂き、利用者に大変喜ばれ助けて頂いています。ゆいまーるの会は、生活困窮世帯へ地域で助け合う団体として、今後も活動を行って参ります。ご支援を宜しくお願い申し上げます。』

カリタス那覇としましてはこのような温かい言葉に触れ、現在行っている活動の方向性が間違っていないことを確認できた一方で、生活に困っている方々からのニーズは依然としてとても大きいものと再確認した次第です。カリタス那覇では、今後も各教会に「ゆいまーるBOX」を設置してのお願い、信徒の皆様から提供された食糧品や寄付金による支援活動や、「ゆいまーるムービングカー」による販売と周知活動を継続して行っていきたいと考えています。コロナ禍も明けようとしております。人の動きも活発になり、コロナ禍前の生活が戻ろうとしている中においても、様々な理由によって毎日の生活に困っている人はいらっしゃいます。カトリック教会とカリタス那覇はそのような方々に対し思いを寄せ、今後も「ゆいまーるの会」と連携を図りながら「二人三脚」で支援活動を進めて参りたいと考えています。皆様の教会に私たちカリタス那覇がお邪魔する際には、引き続き変わらぬご支援いただけますようお願い申し上げます。

(カリタス那覇委員・井手一宏)



2023年4月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時：2023年4月4日(火) 14:00～16:00
午前中聖香油ミサ、昼食を挟んで会議が行われた。

1. 報告及び連絡事項：司会はクレバー神父が担当。

- ・ 前回(3月会議)の報告を新田が行い、承認された。
- ・ ウェイン司教より、石川のカリタス修道会が使っていた修道院について、フィリピンから沖縄へ来ている O.N.D修道会が、幼稚園を手伝いながら、今後の方向性を検討していく予定であることが報告された。居住に必要な手配等は津波古事務局長がしていくことも併せて報告された。
- ・ 4/7、聖金曜日の献金は聖地のための献金なので、献金の意義をあらためて説明するなど、意識して呼びかけを行うようウェイン司教から要請があった。
- ・ 司祭の休暇予定が報告された。4/15～5/19、デニス神父。4/25～7/14、リカルド神父。7/3～8/3、マイケル神父が休暇を申請している。まず、司教の許可を得てから航空券を手配し、休暇中のミサや留守の間の連絡体制を各自で整えるよう要請があった。また、複数の司祭が同じ時期に休暇を取らないよう、各自で調整するよう協力依頼が行われた。
- ・ その他、サマーキャンプについて、日時の選定も含め、小学生・中高生のために準備を進めるよう、担当のナビーン神父に要請が行われた。
- ・ 青少年担当のナビーン神父から、ポルトガルで開催されるワールドユースデーへの派遣について、ウェイン司教に質問があった。那覇教区から5名の参加希望者がナビーン神父に連絡を寄せているが、教区としての支援や取り組みは担当のナビーン神父と協議しながら行っていく方向であることが確認された。

2. 審議事項

- ・ 3教区合同黙想会について、ブイ神父から報告が行われた。6/19～6/23の日程で、安里教会を主会場に開催される。内容についての詳細は後日文書にしてお配りするが、教区司祭は全員参加であることが通達された。最終日は教区の6・23平和巡礼の日に当ててあるので、参加を希望する司祭たちのために、マイクロバス等の準備も進めていること等が報告された。
- ・ 6・23平和巡礼について、ウェイン司教から報告が行われた。小禄教会での巡礼出発前の早朝ミサについては、小禄教会に準備をお願いしてあること、典礼は谷司教を中心に準備、巡礼はナビーン神父を中心に準備を進めていることが報告された。魂魄の塔での祈りの集いは、教区平和委員会が担当することが報告された。巡礼コースの変更の話も出ていたので、確認の上準備を進めるよう、各担当者に要請された。
- ・ 今年1月に、日本カトリック司教協議会から出されたシノドス、「大陸ステージのための作業文書」の読み合わせが行われた。司祭たちは小教区での分かち合いに活用して、日本の教会の一員として取り組みを進めるよう要望された。
- ・ カテキスタ要請講座について、担当のシスター中村の病休に伴い、開催時期を見合わせてきたが、再開の要望も多く、古川神父に責任者を務めて頂き、ピーター・チェ神父も協力して、早めに開催できるよう準備することが決定された。
- ・ 5月の司教訪問の予定について、マーシーさんから報告が行われた。5/14、名護教会公式訪問。5/20～21、宮古島：保良教会・平良教会公式訪問。5/28、開南教会公式訪問。
- ・ 教区が抱える学校法人について、限られた予算の中では、無条件に建て替えやリフォームにお金を使うことはできないことが報告された。少子化の影響もあり教区のほとんどの幼稚園で財政運営に苦慮しており、すでに一部の校・園では改築によって、資金不足が懸念されている。宗教法人が何らかの支援をする必要に迫られている。運営に携わる司祭、助祭、修道者、スタッフの皆さんには、福音宣教を基本に据ながらも、賢明・健全な財務計画をもって運営していけることを強く要望したい。
- ・ 各小教区はフィナンシャルレポートの提出に際しては、銀行からの残高証明書の添付を指示しているが、忘れているところもあるので、提出の際は気を付けるよう事務局長から要請があった。
- ・ 次回5月の拡大司祭・助祭会議は5月2日(火)に安里教区センターで行われる。

世界召命祈願日に寄せて

聖マリアの汚れなき御心のフランシスコ姉妹会 会長 仲大底利子

4 月 30 日世界召命祈願日にあたり、那覇教区の修道会「聖マリアの汚れなき御心のフランシスコ姉妹会」の紹介をさせて頂きます。

1951 年、フェリクス・レイ神父（後に司教）は、奄美大島の 4 名の姉妹を東京「お告げのフランシスコ姉妹会」に、修道会設立準備のため志願者として送り出しました。

1954 年 8 月 15 日、教皇庁より「聖マリアの汚れなき御心のフランシスコ姉妹会」の設立許可を受けました（教皇ピオ 12 世より）。同年 8 月 22 日、4 名の姉妹の初誓願が行われました。

1958 年 7 月 19 日、初代総長エリザベト寛トミ、修練長セシリア川畑与志子と共に、本会の姉妹（立願者 8 名、志願者 4 名）全員、東京から沖縄へ帰りました。

1958 年 7 月 27 日、聖クララ修道院の献堂祝別式。カプチン会のケーヴィン神父が、本会の修道院付司祭並びに霊的指導者となり、本会はカプチン・フランシスコ会の傘下に置かれました。

同年 8 月 2 日より、子どものための教理指導を始めました。1959 年から、一般求道者のための教理指導を始めました。

2023 年の今年、宣教活動開始から 65 年、創立 69 年を

迎えます。これまで、与那原教会、大里巡回教会、クララ幼稚園、首里教会と首里カトリック幼稚園、開南教会と愛児幼稚園、安里教会とマリア保育園、石川教会とヨゼフ幼稚園、宮古教会と保良巡回教会、南静園巡回教会、みつば幼稚園、みつば保育園、石垣教会と伊野田巡回教会、海星幼稚園、海星小学校、小禄教会、具志川教会、読谷教会、普天間教会で、那覇教区の宣教活動に奉仕させていただきました。それも歴代の司教様方、司祭、助祭様方、信徒の皆様方の大きな支えとご指導の賜物であったと深く感謝致します。しかしながら、現在は姉妹の老齢化と召命減少のため、小教区からの要望にお応えできない現状にあります。

創立者フェリクス・レイ司教が本会を創立された目的は、唯一、那覇教区の宣教のためでした。私たちはその使命を忘れたことはありません。召命がなければ教区への奉仕は叶いません。どうか皆様のお子さん、お孫さん、姉妹、友人の中で、那覇教区の宣教のために、生涯をかけて奉仕する修道女が生まれますようにお祈り、お声がけをお願い致します。

宣教活動の近況を一部紹介します。現在は小禄教会、具志川教会、普天間教会、宮古（みつば保育園・幼稚園）、開南（愛児幼稚園）、与那原（クララ幼稚園）で奉仕させて頂いています。

普天間教会



侍者の練習を終えて、調理の前に皆で心 1 つに祈ります。



具志川教会
奉仕・洗礼式に寄り添う

クララ幼稚園



幼稚園での奉仕



おいしいお好み焼きになりますように！



御復活の喜びをともに



4 人の終生誓願式

「パードレ・ピオの集い」開催

さて、この度小禄教会主任司祭、マキシム神父の許可をいただき、5 月から「パードレ・ピオの集い」を開催することになりました。

日 時：毎週水曜日 午後 2 時～3 時 30 分

内 容：聖体顕示、ロザリオ、いつくしみの祈り

場 所：カトリック小禄教会

指 導：ペトロ神父

※どなたでも、どうぞお気軽にお出でください。ペトロ神父

終生誓願式 2 月 2 日



終生誓願式の様子



学校法人 カトリック沖縄学園 公募（求人採用）

あなたのパワーを!!

☼ 第2マリア園	☼ 保育士	☼ 若干名
☼ 真栄原カトリック幼稚園	☼ 幼稚園教諭	☼ 若干名
☼ 幼稚園 預かり保育	☼ 保育補助員	☼ 若干名 (14:00~18:00)
☼ 沖縄カトリック小学校	☼ 体育専科	☼ 若干名 (常勤・非常勤/応相談)
☼ 学童クラブ	☼ 指導員	☼ 若干名 (15:00~18:00)
☼ 学校事務	☼ 事務職員	☼ 若干名



〒901-2215

沖縄県宜野湾市真栄原3-16-1

■お問い合わせ ☎ 098-897-3393

河地カワチ・山城ヤマシロ

平日 8:00~17:00

那覇教区平和委員会

テーマ: **もう一押しだ! 辺野古新基地建設事業は頓挫する**

「～沖縄南部地区の遺骨混じりの土砂問題にも触れて～」



講 師 **北上田 毅** (沖縄平和市民連絡会)

プロフィール

元土木技術者。現場での行動と同時に、防衛局や県への情報公開請求等により、辺野古新基地建設、高江ヘリパッド工事の問題点をあきらかにしてきた。南部の遺骨混じりの土砂問題や、うるま市勝連への地对艦ミサイル配備問題等にも取り組んでいる。

■ とき: 2023年5月28日(日) 午後2時～4時 ■ ところ: 安里教会



NPO 法人ぶどう園の会

訪問看護ステーション クララ

TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)

・営業時間 8:30～17:30

・営業日 24時間365日(緊急対応含む)



ヨセフ 砂川 隆 様
二〇一三年四月十二日 帰天
享年七十九歳

◆石垣教会
アンナ 上地 八千代 様
二〇一三年四月八日 帰天
享年九十八歳

計 報



葬祭の
「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥堀町4-57-3

TEL&FAX:098-885-8205

<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>

E-mail: yasurai@nirai.ne.jp

24時間
受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～
そうてんしゃ

葬 典 社

*創業30数余年・・・。

*皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。

*ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

ひ が たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間
受付

てんごく
☎098-853-1059

